※さとりやもんべえ

進藤由松の家に、若い者たちが集ってあそんでいたが、その一人が由松という名はあまりよくないから、さとりやもんべえと変えた方がよいといいそうかえた。

あるとき、境の酒屋で大判が五枚も盗まれたため、うらない師、禱祈師などを招いてみたがわからなかった。それでさとりやもんべえを迎えに来た。もんべえは困ったが無理やりカゴに入れられた。そのとき途中で自殺するつもりで小刀をもって乗ったが、自殺もできず酒屋についた。もんべえは風呂をたててほしいといった。

風呂に入っていると、女中がやって来て、実はお金は私がとったもので、釜のかげにかくしてあるから、どうか私の名をださないでほしいといった。もんべえは風呂から出て、神棚に禱祈をして「あなたの家では、釜神さんをあまりおがんでいないな」と、いった。

そこで、わかぜをやって掃除をさせたところ大判がでてきた。もんべえは、たくさんのお礼をもらって帰った。このことが評判になった。

その後、江戸大丸屋の娘が危篤になり、医者にみてもらったがよくならなかった。それで飛脚にたのんでもんべえにねがいにきた。江戸にでかけたもんべえは、庭に五丈三尺の橋をかけて酒三升ほしいとたのんだ。もんべえは、この橋からおちて自殺するつもりであったが、酒をのんでも自殺などできなかった。困っていると橋のすみに六尺位の坊主みたいなものがでた。坊主は境の酒屋の釜神でおまえを助けに来たのだといい、この家をたてたとき、門の左側には馬沓、右には縄で作ったさばぐちを若い者がうめたが、それがかえるとへびになって争っているため、娘が病気になった

のだから、掘り出せばすぐなおるといった。そこでまた禱祈をしそのことを話して掘りださせ、お宮を作ってまつらせたところ、娘の病気はなおった。たくさんのお礼をもらって帰り、村一のお金持ちになったという。